

## 論文要旨

氏名 \_\_\_\_\_ 王辰寧 \_\_\_\_\_

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

\_\_\_\_\_ 中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用分析 \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ —作文コーパスをデータとして— \_\_\_\_\_

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。  
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

# 要旨

## 本研究の目的と方法

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者の作文コーパスを用いて、学習者のヴォイスの諸表現（受身文、使役文、可能構文）における誤用を調査・分析したものである。

受身・使役・可能のような表現を含む「ヴォイス」(voice) は、日本語文法において重要な位置を占める現象である。ヴォイスの諸表現は通常、日本語教育において、初級レベルの後半に扱われ始める文法項目であるが、日本語学習者が実際に使用する際には、様々なタイプの誤用が生じうる。

日本語におけるヴォイスをめぐる長い研究史があるが、言語習得の立場からヴォイスを扱った研究、特に、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用に関する研究は未だ十分に行なわれているとは言いがたい。従来の研究では、質問紙調査（馮（1999）、封（2005）など）か、作文などの産出データ（顧・徐（1980）、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、王忻（2008）、望月（2009）、曹（2011）など）を利用しており、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の実態はある程度明らかになっているが、誤用のパターンと原因のどちらかに言及したものが多く、両者を詳しく対応させて分析した研究がまだ少ない。また、助動詞などの動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞の誤用の両面からヴォイスの誤用を捉えた研究や、ヴォイス表現における格助詞の誤用についての議論は少ない。特に、作文などの産出データを利用する先行研究では、データの規模の制約上、ヴォイスのどの構文のどこにどのような誤用がどれくらい起こっているのか、また、その原因は何なのかという問題を部分的に扱っている研究が多く、総合的な誤用研究があまり現れていない。

本研究の課題は、大規模な作文コーパスデータを体系的に調査・分析し、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイス表現の誤用の全体像を明らかにすることである。より具体的に言えば、本研究では、于康（2015）『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 に見られる、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における動詞の形態的なタイプの誤用（受身文における「(ラ) レル」、使役文における「(サ) セル」、可能構文における可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」の誤用）と、格助詞の「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）を調査・分析し、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- 1) 受身文、使役文、可能構文における動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用はどれくらい起こるのか。
- 2) 具体的にどのようなパターンで誤用が起こるのか。
- 3) 誤用の原因は何か。

また、以上を踏まえ、それぞれのヴォイス表現の誤用の共通性・個別性についても検討する必要がある。本研究では、以上の問題を体系的に調査・分析し、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文のようなヴォイス表現で起こる誤用の全体像を示すことを目指す。

分析の枠組みとして、まず、本研究では、ヴォイスの動詞の形態的なタイプと格助詞の両面から誤用を捉えるために、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用はいずれも、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」に分類できることを示した。

また、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」は、いずれもヴォイス形式の有無や混同に関わる「欠如」、「過剰」、「混同」という3つのパターンで起こるという点で共通していることも示した。本研究では、これらのパターンから誤用を捉え、それぞれのパターンにおける誤用の原因を分析した。

さらに、受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」は、ヴォイスに関わる誤用とヴォイスに関わらない誤用（例えば、受身文における場所を表す意味格としてのニ格とデ格の混用）に分類し、それぞれどれくらい起こっているかを明らかにしたうえで、ヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用とその原因を分析した。

## 各章の内容

本研究は、八つの章で構成されている。

まず、第1章「序論」は、問題提起、本研究の目的および方法、構成について、本研究の全体像を説明した。

次に、第2章から第3章までは、総論として、具体的な分析の導入を行った。

第2章「先行研究のまとめと本研究の立場」では、先行研究を概観し、本研究の立場と課題を提示した。具体的には、まず日本語のヴォイスに関する先行研究を概観し、日本語のヴォイスの定義や分類をまとめたうえで、本研究で扱うヴォイス表現を提示した。次に、日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究を概観し、先行研究で残された課題を示した。最後に、これらを踏まえ、本研究の分析の範囲および中心となる課題を明確化した。

第3章「中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査」では、本研究で行った、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査の方法について述べた。具体的には、まず、従来の学習者コーパスとの比較を行いながら、本研究で使用するコーパス

の基本情報を示した。次に、このコーパスのうち、本研究で使用する受身文、使役文などのデータの情報をまとめた。また、調査を行う手順を説明し、基本的な集計結果を示した。

この第3章では、受身・使役・可能における誤用はいずれも、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」に分類できることを示した。また、誤用の数からみる誤用の全体像として、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」のいずれにおいても受身文における誤用例数が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。かつ、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」の三者のうち、どのヴォイス表現でも「述部の誤用」が一番多く、その次が「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」の順になっていることが明らかになった。

次に、第4章から第6章までは各論として、受身文、使役文、可能構文について、それぞれの構文における誤用の詳しい分析を行った。

第4章「受身文における誤用の分析」では、受身文における誤用の分析を行った。

具体的には、まず受身文の意味分類、格の交替、その誤用に関する先行研究を概観し、そのうえで、本研究における受身文の分類と扱う現象の範囲を提示した。次に、第3章で示した誤用の種類に基づき、受身文における誤用について、誤用の数、パターン、原因などの分析を行った。

調査・分析の結果、まず、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」（「(ラ)レル」の誤用）には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがあることを示した。「欠如」、「過剰」、「混同」は受身の助動詞「(ラ)レル」の有無や、他のヴォイスとの混同に関わる誤用で、「その他」は受身文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。誤用例の数から見ると、「(ラ)レル」の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、受身文の意味分類で見た場合、非情物主語を取る「状態・属性描写」の意味を表す受身文の誤用が多い。さらに、「(ラ)レル」の「過剰」と「欠如」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。これに対して、「混同」と「その他」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。特に、本研究では、動詞の意味に注目して「(ラ)レル」の「過剰」と「欠如」の誤用を分析したため、どのようなタイプの動詞で受身の「(ラ)レル」が過剰または欠如を起こしやすいかを明らかにした。

次に、学習者の受身文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」（格助詞「ヲ」「ニ」の誤用）のうち、「ヲ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ニ」より高いことが分かった。また、正用の助詞別に見ると、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用、つまり、直接受身文でヲ格が残留している例が多く見られた。これは、直接受身文で格の交替が必須であることへの不十分な理解により生じていると考えられる。また、「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」パターンのような、直接受身文におけるニ格以外による動作主の表し方を習得しにくいことにより生じている誤用も見られた。このように、格助詞側の誤用は主に、学習言語への不十分な理解により生じているが、格パターンだけではな

く述部も誤っている複合的な誤用では母語の影響が関わるものもあることが明らかになった。

第5章「使役文における誤用の分析」では、第4章と同じ手順で、学習者の使役文における誤用の数、パターン、原因などの分析を行った。

調査・分析の結果、まず、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「述部の誤用」（「(サ)セル」の誤用）には、「欠如」、「過剰」、「混同」という三つのパターンがあることを示した。誤用例の数から見ると、「(サ)セル」の誤用は、「欠如」、「過剰」のパターンで起こりやすい。また、使役文の意味分類から見ると、「因果関係」の意味を表す使役文の誤用が多い。さらに、「(サ)セル」の「欠如」と「過剰」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。これに対して、「混同」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。特に、本研究では、使役文の意味分類と動詞に注目し漢語サ変動詞の「(サ)セル」の「欠如」や、心理系の動詞の「(サ)セル」の「過剰」、再帰性を表す使役文における「(サ)セル」の「欠如」や「過剰」が見られることを示した。

次に、学習者の使役文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」（格助詞「ヲ」「ニ」の誤用）のうち、「ニ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ヲ」より高い。また、正用の助詞別に見ると、特に「ヲ→ニ」パターンの誤用と「ニ→ヲ」パターンの誤用が多く見られた。これは、他動詞／自動詞の使役文における動作主体の表し方を十分に理解できていないことにより生じていると考えられる。このように受身文における誤用と同じく、格助詞側の誤用は主に学習言語への不十分な理解により生じているが、動詞側の誤用がある例では母語の影響が関わるものもあることが明らかになった。

第6章「可能構文における誤用の分析」では、第4章、第5章と同じ手順で、学習者の可能構文における誤用の数、パターン、原因などの分析を行った。

調査・分析の結果、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「(ラ)レル」・「ことができる」の誤用）には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがあることを示した。誤用例の数から見ると、可能形式の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、可能構文における可能形式の種類から見ると、可能動詞の誤用が多い。さらに、可能構文の意味分類で見た場合、「状況可能」の意味を表す可能構文の誤用が多い。「過剰」と「欠如」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。これに対して、「混同」と「その他」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。特に、本研究では、可能構文の成立条件を満たしているかどうかに着目しながら、「過剰」の誤用を分析した。また、「過剰」と「欠如」の誤用では、今までの研究であまり提示されていない母語の負の転移による誤用、認識のモダリティに関わる場合の誤用もパターンごとに詳しく分析した。

次に、学習者の可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」（格助

詞「ヲ」「ニ」の誤用)のうち、「ヲ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ニ」より高い。また、正用の助詞別に見ると、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用と「ニ→ノ」、「ニ→〇」、「ニ→ハ」パターンの誤用が多く見られた。これは、特定な可能構文の場合におけるヲ格からガ格への交替の必要性のような、可能構文における格の交替の規則の不十分な理解により生じていると考えられる。以上のように、受身文と使役文における誤用と同じく、格助詞側の誤用は主に、学習言語への不十分な理解により生じていることが明らかになった。

第7章「ヴォイス諸表現における誤用の分析」では、前章までのそれぞれの構文における誤用分析を踏まえた総論として、ヴォイス諸表現における誤用のパターンや原因などの共通性と個別性について検討し、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用への対応に貢献できる点を示した。

まず、ヴォイスの諸表現の「述部の誤用」の共通性と個別性として、「欠如」、「過剰」、「混同」という3つのパターンで誤用が起こるという点で共通していることが指摘できる。誤用の数からみると、どのケースでも「欠如」、「過剰」のパターンが多いことが分かった。また、「混同」のパターンにおいては、受身文と使役文、受身文・使役文と可能構文、受身文・使役文・可能構文と授受文、あるいは、受身文・使役文と使役受身文の間で混同が見られ、可能構文においては可能形式間の混同も見られた。「その他」のパターンの誤用は可能構文で多数見られた。さらに、それぞれの構文で誤用が多く見られる特定の意味用法がある。ヴォイスの諸表現と自他動詞構文の混同、自他動詞の混同、「混同」、「その他」の誤用の共通している原因、本研究で言及した日中両言語の構文特徴の相違点、それぞれのヴォイス表現に特有の現象のような、ヴォイスの諸表現の「述部の誤用」の原因の共通性と個別性も明らかにした。

次に、ヴォイスの諸表現の「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」の共通性と個別性として、ヴォイス関連・非関連の誤用が起こるという点が指摘でき、正用の助詞別にさまざまなパターンが見られた。また、誤用の数からみると、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用+述部の誤用」のどちらにおいても、受身文における誤用例数が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。しかし、ヴォイスに関わる誤用の割合は、使役文が一番高く、その次が可能構文、受身文の順になっている。さらに、これらの誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じているが、学習者はそれぞれのヴォイス表現における格の交替の規則をうまく理解できていないため、それぞれの構文に特有の原因が見られる。

さらに、ここまで明らかにした学習者の誤用の実態が日本語教育に示唆する点として、誤用を防ぐ示唆として、①日本語教育であまり詳しく扱われていない意味用法への注目、②ヴォイス表現と自他動詞構文に関する指導、③ヴォイス表現の間の混同を防ぐための指導、④日中両言語におけるヴォイス表現の相違点に関する指導、⑤ヴォイス表現における格と述部の形態をはっきり示した指導、⑥ヴォイス表現のそれぞれのルールの指導のよう

な点で工夫が必要であることを述べた。

最後に、第8章「結論と今後の課題」では、本研究の結論を提示し、今後の課題について述べた。まず、本研究の結論として、①誤用の分類、②誤用例数の分布、③誤用のパターンおよび原因、④日本語教育への示唆をそれぞれまとめた。また、今後の課題として、本研究で用いたコーパスにおける学習者の正用例の確認、「回避」による非使用の例の検討、学習歴別の分析、本研究の調査結果の一般化の検証のための他の学習者コーパスの調査・分析を挙げた。

### 本研究の成果と意義

以上のように、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用を調査・分析し、誤用の全体像、パターンおよびその原因を明らかにするとともに、日本語教育への示唆を行った。

従来の研究でも、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の実態はある程度明らかにされてきたが、本研究では、動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞の誤用の両面からヴォイスの誤用を捉え、ヴォイス表現の意味と誤用との関係についても見ることで、誤用の全体像を示すことを試みた。さらに、より多くの誤用例から、誤用のパターンを再整理し、今までの研究で詳しく議論されていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の未習得の部分の特定と、誤用のパターンと誤用の原因を対応させた分析を行った。さらに、個別の構文の分析だけでなく、ヴォイス表現に広く見られる誤用の共通性や個別性の分析を行い、日本語教育への示唆もまとめた。本研究の成果によって、ヴォイスの諸表現のどこが学習者にとって難しいポイントであるかが明らかになり、それを判断材料として、ヴォイスに関して「何をどう教えるか」という日本語教育場面で直面する問題への応用も期待できると考えられる。